

2023年度一般選拔
事前提出課題
《問題用紙》

次の文章は、島沢優子（2022）『スポーツ毒親』第5章「少年球児をうつ状態にした父」の一部です。次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

お父さんコーチの後悔「息子を委縮させるダメ親父でした」

大阪府在住で少年野球のコーチを務める T は、長男が小学校3年生で入団したクラブで指導を始めた。会社勤めをしながらボランティアで指導する。俗にいうお父さんコーチである。

「もうね、コーチなんていう立派な肩書じゃない。息子を委縮させるだけのダメ親父でした」

息子がエラーしてチームが負けた、ここぞのチャンスに打てずに負けた——結果が伴わないときに怒った。ティッシュボックスを投げつけたりした。人前でやることはなかったが、帰りの車の中でたたいた。

「お前のせいで負けたんじゃない！」

密室になり、誰も見ていないと、あふれるイライラや怒りを抑えられなかった。ただし、利き手ではない左手でたたいた。右手だと力が入りすぎるからだ。

4年生、5年生と高学年になるにつれて手を出す回数は増えた。試合後に自宅に帰り、野球中継と一緒に観る。プロの華麗なプレーや、最頂のチームの勝ち負けを楽しむのであればいいが、当時の T 家は違った。

テレビに映るプロのプレーに、父が「今の見てた？」と息子に目をやる。技術を教えようと考え「ほら、ここな」と言っても、息子はもう野球のオンタイムではない。

「違うとこ見てたりするんでお前何してんねん！」と怒って、またポカリとやるわけです。こっちは一生懸命説明してるのに、あくびしてたとか。もう、しょっちゅう叱ってました」

父の怒鳴り声に平手打ち、子どもの泣き声。楽しいはずの夕げの食卓は、度々台無しになった。

「なんでそこまでせなあかんの？　そこまでせなあかんのなら、もう野球やめてほしいわ」
そうやって妻に何度なじられたかわからない。

食卓が修羅場になると、長男はすぐ隣に住む祖父母宅に逃げ込んだ。4年、5年と学年が進むにつれて徐々に表情がなくなり（うつなのかも？）と T が心配する時期もあった。だが、スパルタは続き、「練習行きたくない」と祖父母の家に逃げ込んだ長男を引きずって練習に連れて行った。体調不良で発熱しても無理やり参加させた。

それでも、6年生になると公式戦はほとんど勝てた。地域のカップ戦は優勝、準優勝が続いた。シーズンの終わりが近づき、中学生になったら野球をどこで続けるかを決めなくてはいけない時期に入った。軟式野球にするのか、硬式にするのか、中学の野球部か、クラブか。さまざまな選択肢があるなか、クラブチームなどから誘いもあった。

ところが、長男は父にあっさり告げた。「野球はもうええわ。小学校で引退や」
言葉を失った。

「6年生になってそれなりに勝ってたし、試合も出てました。勝てば楽しいんやから絶対野球やると思った。ほんま驚きました。僕のやり方が悪かったのかなと落ち込みました」

子どもは、勝てば楽しいわけではない、自分たちは野球そのものの楽しさを伝えていなかった——このことに気づき、愕然とした。途方に暮れる父を救ったのが、中学生の野球クラブだった。野球はもう引退という息子に、Tは「いくつかのクラブの体験に行ってから決めたら」と食い下がった。いくつかのクラブの練習に参加して、それでも嫌だと言えばあきらめるつもりだった。

ある日、入団体験から戻ってきた長男が言った。

「お父ちゃん、僕、あそこで野球やるわ」

そうか。そんなら続けたらええわ。そっけなく答えたが、胸が熱くなるほどうれしかった。

息子の選んだクラブ、それは横浜 DeNA など活躍した筒香嘉智を育てた「堺ビッグボーイズ」だった。中学年代のクラブチームで構成される「日本少年野球連盟ボーイズリーグ」に所属している。

長男が初めて練習に行った日のことは、今でも忘れない。仕事から帰宅しリビングでテレビを観ていると、玄関でドサッとバッグが置かれる音がした。バタバタと小走りで現れた息子は、満面の笑みを浮かべていた。

「ああ、楽しかった！」

父と母は二人で顔を見合わせた。

「え、今初めてちゃう？ あの子が野球やってきて、楽しかったとか。初めて聞いたな？」

妻が目を見開いて驚いていた。

「あの笑顔とあの言葉は、ほんま忘れられないです。そこから僕は、やっぱり勝つだけじゃあかんのやと考えるようになりました。僕らを変えてくれたのは堺ビッグボーイズでした」

長男が堺ビッグボーイズに入団したのは2012年。Tは「子どもをガンガン圧迫するような指導ではありませんでした。昔は厳しかったそうですが、もう変わっていました。おそらくその当時は関西でも珍しかったと思う」と振り返る。

大阪市の高校バスケット部の生徒が自死したことなどを機に、暴力やパワハラ指導をなくす機運が高まったのが2013年。それより前に同クラブは方針転換していた。

島沢優子 (2022) 「スポーツ毒親」 文藝春秋 p.160-164

*なお、入試問題の性質上、お父さんの個人名はイニシャル表記に改めました。

問1 「野球はもうええわ。小学校で引退や」と言っていた長男が、「お父ちゃん、僕、あそこで野球やるわ」と、「堺ビッグボーイズ」で野球を続けようと思ったのはなぜか。

「～から」という形で、15文字以内で答えなさい。

問 2 この文章を読んで、これからの「スポーツ/スポーツ指導のあり方」はどうあるべきか。あなたの考えを 400 字以内で述べなさい。